様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８ＫＴ００８２

研究課題名（和文）臨床音楽学研究：知的障害者を含む音と言葉による対話の場の構築

研究課題名（英文）Clinical Musicology: Building a place for dialogue through sound and words, including for people with intellectual disabilities

研究代表者
沼田　里衣（Numata, Rii）

大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：１０５８５３５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：①〈こえ、ことば、音〉の３つの要素を活かした包摂的な表現と対話セッションを組み合わせた活動のエンパワメント、②上記３つの要素が層をなして進行する協働創作プロセス、③教育・福祉領域に関する即興音楽研究、即興音楽療法研究を踏まえた、「動いている音楽」という概念、④音やからだを使った表現活動と共にある言語的対話の分析、⑤障害者を含むマイノリティの人々による表現活動において他者の表現行為が、表現する人々のなかで内化されて新たな表現を生み出す歴史的対話の意義、これらが異なる背景をもつひとたちが異なるコンディションにありながらともに表現に向かう実践の重要な基礎をなすことを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、音と言葉による対話の場をリンクさせ、その対話の内容を学術的に分析した点で意義があると考える。具体的には、音楽を中心とした即興表現団体「おとあそび工房の参加者と共に、音やからだによる表現だけでなく、言葉を使って対話を行い、現場の課題と理論研究を同時並行で行う手法を開拓し、その意義を明らかにした。こうした理論と実践の往復による研究は、学術研究を直接社会に還元できる性格の研究であると考えている。さらに、「他者・音楽・研究」会を立ち上げ、研究者・実践家と共に障害者を含むマイノリティの人々による表現活動に関して領域横断的に研究する基盤作りを行なったことも、学術的意義が高いものと考える。

研究成果の概要（英文）：We found the following five points to be important foundations for the practice of people from different backgrounds working together to express themselves in different conditions. (1) Empowerment of activities that combine inclusive expression and dialogue sessions consisting of the three elements of voice, language, and sound. (2) Collaborative creation process in which the above three elements proceed in layers. (3) The concept of "music in motion" based on improvisational music research and improvisational music therapy research in the field of education and welfare. (4) The dialogical combination of language and expressive activities using voice, sound, and body. (5) The historical dimension of dialogue in which minority people, including those with disabilities, internalize the expressive behavior of others and create new forms of expression.

研究分野：音楽実践研究

キーワード：臨床音楽学　臨床哲学　知的障害者　即興音楽　コミュニティ音楽療法　コミュニティ音楽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究「臨床音楽学研究：知的障害者を含む音と言葉による対話の場の構築」は、音楽学と音楽療法の接合点として議論の端緒にある臨床音楽学について、臨床哲学において蓄積しつつある哲学対話の研究を参照して実践の場を構築し、理論化を行うものである。対象の実践領域においては、音楽活動を継続する上で、障害者本人との音楽的対話だけではなく、介助者を含む人々との言語的対話が課題となっている。こうした状況において、本研究は、直接概念を扱わない音による対話と、臨床哲学における生きづらさを抱えるひとたちとの哲学対話の議論を架橋した研究を行うものである。関連領域は、音楽療法における即興的対話の研究を出発点とし、コミュニティ音楽療法、音楽学の新しい議論の潮流である新音楽学と呼ばれる研究、そして臨床哲学の研究を取り入れた研究等である。

こうした学術背景に加え、実践研究においては、音楽活動を継続する上で、障害者本人との音楽的対話だけではなく、介助者を含む人々との言語的対話が重要な意味を持つことが、新たな課題として浮上している。

２．研究の目的

本研究の学術的「問い」は、「知的障害者を含む人々との音と言葉による対話活動を同時並行的に実施することにより、どのような社会一般との新たな関係が見られるか」である。障害者を含む地域の音楽活動に関して音楽・言語的対話の両面からの理論的基盤形成が必要であり、その為には臨床哲学の研究と架橋した臨床音楽学の議論の更なる展開が重要である。

３．研究の方法

本研究は、①音と言葉による実践研究の実施、②調査・分析、③公開研究会、④理論化という４つの流れから成る。

①音と言葉による実践研究は、音を中心とした活動と言葉を用いる活動の双方を互いに連携させる形で同時並行的に行い、課題を明確化し、共有する方法を開発する。音による活動は既存の即興音楽表現活動を行う団体「おとあそび工房」に加えて広く一般の人を募集して行い、言葉による活動は、それらに関わる人を中心に、開かれた形で参加者を募集し、様々な場所で多様な人を対象に哲学対話活動を行う。

②の調査・分析では、①の活動を記録収集・記録処理（沼田）、映像を用いたマイクロ分析（ほんま）を行い、個々人へのインタビューを通して①で得られた質的データ資料を補強する。また、当該研究課題に関する海外の事例を広く渉猟・検討し、①で得られた質的データを多様な専門的知見から分析することで、日本社会における障害者の社会参加をまとめるための資料を蓄積する。

③の公開研究会では、それらの振り返りを目的として、関連諸領域の専門家・研究者を招聘して研究会を実施し、障害者とその介助者が抱える問題を社会の様々な人々と広く共有する場を構築する。研究会においては、専門家や研究者のみではなく、当事者を交えたアクティブ・ラーニングの手法で問いや考え方を深めていく。これらの実践研究により、音と言葉によるファシリテーターを育成し、障害者とその介助者をエンパワメントする。

④の理論化に向けては、調査結果をもとに論文を執筆し、関連諸学（障害学、音楽学、哲学、美学、芸術論、ケア論、障害者芸術論）との往復から臨床音楽学研究としての構想を練る。

４．研究成果

本研究の主な成果は、次の 3 つに集約される。

第一に、実践研究として、〈こえ、ことば、音〉の３つの要素を活かした実験的ワークショップ、及び対象の表現団体「おとあそび工房」における舞台公演（写真 1）とその振り返りの会（写真 2）を行い、その組織運営をエンパワメントしたことである。これらの成果は、次のような形で各種学会にて発表した。前者の〈こえ、ことば、音〉の３つの要素を活かしたワークショップから得られた知見は、2019 年度のアートミーツケア学会の分科会において、「こえ、ことば、音による対話～技術や価値観の差異を超えた多様な人々との場づくりから振り返りまで～」と言うタイトルで発表し、これらの３つの要素が層をなしながら進行していく協働の創作プロセスについて考察した。また、実践の場における手法については、2021 年度の日本音楽即興学会にて、音楽づくりの手法そのものから、参加者と共に音や言葉を使った対話を通して考える方法をまとめ、発表した。

第二に、こうした活動の意義や意味について分析した論文をまとめたことである。2019 年度には、教育・福祉領域における音楽活動をより柔軟に考えていけるための考え方を即興音楽研究、即興音楽療法研究の二つの議論の流れをもとに整理し、「動いている音楽」というタイトルのもと、日本音楽即興学会の学会誌にて発表し、学会賞を受賞するとともに、音楽づくりによる社会的インパクトをテーマとした国際学会でも発表を行なった。また、2021 年度には、音やからだを使った表現活動と共にある言語的対話について、「おとあそび工房」に

おける対話を取り上げ、その意味を分析した。その結果、こうした対話の営みは舞台上の具体的な表現活動のみならず、さまざまに異なる背景をもつひとたちが異なるコンディションにありながらともに表現に向かう実践の重要な部分であること、また、この活動が固定されることなく変容していくための本質的な部分であることが、同活動の参加者を交えた対話研究セッションにおいて見出された。

最後に、これらの研究をもとに、今後こうした研究を展開していく上での「臨床音楽学研究会」発足に向けた準備を行なったことである。2022 年度は、参加型の音楽実践をおこなう研究者らとともに研究会を合計 6 回実施し、障害者を含むマイノリティの人々による表現活動をパフォーマンスや文学まで範囲を広げ、それらの活動において他者の表現行為やことばが、表現する自己のなかで受容、内化され、さらに新たな表現を対話的に生み出していくという創造的循環が、歴史的次元における対話をなしていることなどを考察した。そのまとめとして「他者・音楽・研究」会を実施した。この基盤をもとに、今後同種の課題を持つ研究者・実践家と共に領域横断的に研究を進めていきたいと考えている。

（写真 1 2019 年 12 月 22 日おとあそび工房公演「おとあそび見本市」より）

（写真 2 2018 年 2 月 11 日おとあそび工房振り返りの会）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 沼田里衣、ほんまなほ	４．巻 第13号
２．論文標題 音とことばによる対話に関する臨床音楽学研究：「おとあそび工房」における試みから	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アートミーツケア学会	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ほんま なほ、松本 渚、小泉 朝未、高橋 綾	４．巻 11
２．論文標題 カマは燃えている ：「 総合術」プロジェクト：「ココ〈ボール〉ルームでなりたい自分になる」をかんがえる	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Co＊Design	６．最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋 綾、ほんま なほ	４．巻 4
２．論文標題 組織と対話についての不都合な真実：なぜ生協理事会は組織に関わる人の違和感をスルーしなかったのか？	５．発行年 2022年
３．雑誌名 臨床哲学ニューズレター	６．最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ほんま なほ	４．巻 4
２．論文標題 フェミニズム臨床哲学とクリエイティヴ・ライティング	５．発行年 2022年
３．雑誌名 臨床哲学ニューズレター	６．最初と最後の頁 181-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ほんまなほ	4．巻 3
2．論文標題 臨床哲学からフィロソフィへ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床哲学ニューズレター	6．最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沼田里衣	4．巻 5
2．論文標題 『動いている音楽』―社会的課題と結びついた即興音楽の美的戦略に関する一考察―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本音楽即興学会誌	6．最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 沼田里衣
2．発表標題 コミュニティ音楽における音楽の参加方法に関する実践研究
3．学会等名 日本音楽即興学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Rii Numata
2．発表標題 Music in Movement: Examining the relationship between musical style and the aims of community music therapy
3．学会等名 16th world congress of music therapy（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 沼田里衣
２．発表標題 音楽する場を作ること：音楽教育、アートマネジメントの例とともに
３．学会等名 OCUテニュアトラック研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 ほんまなほ、沼田里衣、他
２．発表標題 多様性と表現
３．学会等名 対話フォーラム　あらためて「多様性」をかんがえる
４．発表年 2021年

１．発表者名 沼田里衣
２．発表標題 音楽の場を「動かす」 こと～多様なつながりのなかでの遊び方～
３．学会等名 アーツカウンシル新潟語りの場 Vol.18　（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 沼田里衣
２．発表標題 遊びながら新しい音をみつけること～関係性から社会を考える～
３．学会等名 人権・福祉・まちづくり講座②
４．発表年 2020年

１．発表者名 Rii Numata
２．発表標題 ‘Music in Movement’- Beyond the borders of improvisation
３．学会等名 IV International SIMM(Social Impact of Music Making)-posium（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 沼田里衣、ほんまなほ
２．発表標題 こえ、ことば、音による対話～技術や価値観の差異を超えた多様な人々との場づくりから振り返りまで～
３．学会等名 アートミーツケア学会2019年度大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 ほんまなほ
２．発表標題 語りあいの場をつくること、こえをあげることのむずかしさ
３．学会等名 セミナーとワークショップ「インクルージョンと’Belonging’」
４．発表年 2019年

１．発表者名 沼田里衣
２．発表標題 動いている音楽－臨床音楽学研究として
３．学会等名 OCUテニュアトラック研究集会2018『教育とコミュニティ活動における対話と即興音楽』
４．発表年 2019年

１．発表者名 ほんまなほ
２．発表標題 こえ　ことば　詩　うた
３．学会等名 OCUテニュアトラック研究集会2018『教育とコミュニティ活動における対話と即興音楽』
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	本間　なほ（ほんまなほ） (Homma Naho) (90303990)	大阪大学・ＣＯデザインセンター・教授 (14401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関